

「デンマークの光の経験」

上坂 海月

キーワード: デンマーク、光、ヒュッゲ、気象、感覚

要旨

第1章の序論では、この論文における二つの問いを提示する。一つに、デンマークではどのように光が経験されているのか。二つ目に、その光の経験の中で、いかに視覚以上の経験がされているのかという問いである。光に関する先行した人類学研究は、その前提となる姿勢が物質文化論的／現象論的なものに二分化する傾向にある。しかし本研究は、存在論的な前提に立ちつつも、具体的な調査事例に根ざして光を捉えるという、光の存在論的人類学研究の試みである。第2章では、この分野において代表的なインゴルドとビレの言説を、近年の議論的展開を踏まえてまとめる。第3章では、デンマークの概要と光源発達の歴史をまとめ、またデンマークと光に関する先行研究を紹介する。第4章では、調査の概要を説明する。第5章では、筆者が現地で生活する中で経験したデンマークの気象と、友人宅への訪問やインタビューを踏まえ、過去から続く光と共にある人々の生活を振り返る。冬が暗くて寒いデンマークにおいて、生きられた経験としての光は、暗闇に灯る小さな火の光であり、人々はそこに生命を重ねてきた。第6章では、そのような光の経験が、いかに視覚経験以上のものとして受け取られているのかを明らかにするため、筆者自身の経験や友人の語りを元に、気象と気持ちの連動や、ヒュッゲの感覚と感情を中心に考察する。暗闇の中で光を灯すことは、個人の生の歴史の中で蓄積されてきたヒュッゲを感覚することである。それは、家族から受け取る愛情や生の喜びから芽生える強い感情である。光は暗闇の中でこそ見つけられるのであり、氣力を奪われる冬の精神状態でこそ、光の中に生命や愛を見つけ、より強く感じることができると結論する。第7章でまとめられる以上の結論は、存在論的な立場から光の経験を捉え直したものであり、さらに視覚中心的に光やヒュッゲを捉える傾向に挑戦した独創的なものである。そして、光についての考察を抽象的な現象論に還元しない、現場の文脈を踏まえた結論として、意義がある。